

年
衣
で
お
む

《 3 》

古
平
の
歴
史

《3》

古平場所として、藩主からアイヌの人たちとの物々交換（交易）の権利を与えられた藩士（知行主）は、定められたように自分たちで船を雇い、松前で品物を仕入れて来ては古平のアイヌの人たちと、年一回の交易をし、それをまた松前に持ち帰っては商人に売って利益を得ていました。

てくれだろ、という期待があったからです。

■岡田家が交易を請け負う

いよいよ藩士に代わって商人が交易をすることになりましたが、当時、松前に支店を持ち藩の御用達もしていたという岡田家が、この古平場所を請け負うことになりました。

岡田家の屋号は恵比須屋で本業は、初めは呉服や雜貨類を扱

しかし、何と言つてもふだんから威張っている武士のこと、商売となると思うようにうまくいきませんでしたし、だんだん商売も煩雑になつてきました。そこで考へついたことは、一定の権利金を取つてそれらのことを商人に任せてしまうことです。商人ならきつとうまくやつ

岡田家の屋号は恵比須屋で本業は、初めは呉服や雑貨類を扱っていましたが、藩や藩士に金銭を貸し付け、その支払いのためにそれぞれの場所の産物を引き受けたりしていて、そのような関係から場所請け負いをする事になったと考えられます。

古平場所をいつごろから請け負うようになったのかはつきりしませんが、ヲタルナイよりは

幾分早いのではないかと言われています。ヲタルナイ場所の請け負いをしたのは、一説では元禄十三年(一七〇〇)といえますからそれより前、今からざっと三百年前になります。テレビドラマや芝居で有名な『忠臣蔵』の起りは、その翌年の元禄十四年のことです。北海道漁業史には、古平場所のことが次のように書かれています。

ました。

今の静内町（日高）辺りで勢力のあつたシャクシャインが、交易にからんで和人への不満から戦いを起こしたのです。これに應ずるように西蝦夷でも戦いが起こりました。

記録を見ると、「上の国で殺された人数の覚」という中に、

一、与一（余市）で四十三人

一、フルヒラ で十八人

「石狩・厚田・浜益・古平・美
国・積丹各漁場は、宝永三年
(一七〇六)はじめて請負人あり」

■ ジャクジャインの乱
 これよりも前になりますが寛文九年（一六六九）に、世の中を驚かすような大事件が蝦夷地で起き

では百五十三人が死に、歌棄からは百五十三人が死に、歌棄からは祝津の間と増毛で商船八隻が襲われた、とあります。



■先の見えない交渉

組合側は昭和四十四年十二月九日、売山計画に関して九項目にわたる要求書を出し、このような状況になってしまった会社の経営責任を追求して、強く要求の貫徹を迫ったが具体的に満足できる回答が得られず、その後の交渉もまた難航した。

■ついに北進鉱業へ売山
難しかった交渉もようやく両者が歩み寄り、最終的な合意に達した鉄興社では、日本鉱業㈱の仲介によって同社の子会社である北進鉱業㈱へ売山することになり、ここには大江鉱山との合併が決まった。

この合併について、同年二月一日付けの北海道イムスは次のように報じている。

二鉱山（稲倉石と大江）が合併

鉄興社・北進鉱業で合意

「鉄興社（本社・東京、資本金三十三億九千二百万円、北山武社長）は、このほど同社のマンガン鉱山である稲倉石鉱山（古

＝百年の歴史を閉じる＝

稲倉石鉱山

〈完〉

平町）を北進鉱業（本社・東京、資本金一億二千万円、阪崎英生社長）の大江鉱山（仁木町）と合併することに決めた。（以下略）

稲倉石鉱山の引渡式は、翌年の昭和四十五年三月二日に行われたが、稲倉石鉱山と大江鉱山は鉱床が続いているとみられ、最近では両鉱山の坑道の先端は二ギメートル近くにまで接近していて、両鉱山の鉱区の調整はかねてからの懸案でもあった。

■消えるヤマの灯

この合併によって稲倉石鉱山の人員は大幅に削減されたが、昭和五十四年現在の従業員数は四十七人で、月産二千六百トンの粗鉱を生産していた。

稲倉石鉱山からの鉱石は、東洋曹達㈱日向工場（宮崎県）や日本鋼管㈱新潟工場（新潟県）へ送られていたが、その後のマンガン業界の不況から昭和五十九年ついに廃山となり、明治十八年（一八八五）の発見から一世紀の

後、ここに波乱に満ちた鉱山の歴史の幕を閉じたのである。

■歴代の稲倉石鉱業所長

初代	石川 利男	昭和5・4・1	同	昭和14・3・31
二代	日野 神児	昭和14・4・1	同	昭和17・11・14
三代	石川 利男	昭和17・11・15	同	昭和21・2・28
四代	宇須井 昇	昭和21・3・1	同	昭和22・5・31
五代	日野 神児	昭和22・3・6	同	昭和35・3・20
六代	青柳 泉	昭和35・3・21	同	昭和41・3・31
七代	井上 光雄	昭和41・4・1	同	昭和45・3・1



↑
鉱石の輸送に活躍した鉄索



→
新技術を誇った浮遊選鉱場

七夕まつり

竹内コト

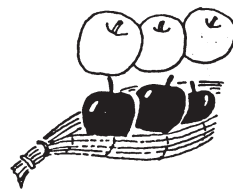
私たちの小さいころ——といつても、つい二十年くらい前までは七夕まつりがあったように記憶しています。それも今の所に住むようになってからは、まったく七夕まつりも姿を消してしまいました。

思い出すと、七夕が近づくと山へ行つて、まず枝ぶりのいい柳を取つて来て、当日、それにいろいろな飾りつけをします。「七夕まつり」や「天の川」などと書いた短冊や折り紙を柳の枝に下げ、それにちようちんを持って、辺りが暗くなるのを待つて町なかを歩きます。中には小さい神輿も出ることがありますが、いつもの遊び仲間が一同となつて近所の家々を廻るのです。昔は街灯も少なくそれに暗かったので、七夕のちようちんの明かりはよく目立ちました。飾りつけた柳やちようちんを

持つて家々の戸口に立つては、「ことしや（今年は）豊年七夕祭りヨ
ろーそく出せ出せよ
出さねばかつちやくぞ
おまけにくつつくぞ」
声をそろえて、威勢よく大声で叫ぶのです。するとそれを待つ

昔の入船町のこゝと

渡辺ハツエ



ていたように、それぞれの家ではろうそくやお菓子のほかに、わずかですがお金をくれる家もあります。貰ったものをみんなで分けるのが大きな楽しみだったようです。

このはやしことばも今ではもう聞くこともなくなり、夏の子どもたちの行事がまた消えていくのをさびしく思っています。

古平町の象徴とも思われる丸山のふもとで過ごした六十余年の歲月、カラスの鳴き声に目覚め、そしてまた、日の暮れる間に帰る頃までも一生懸命に働いていた、今は亡き両親を懐かしく思い出されます。
私が子どもの頃に見ていたカ

ラスはとつても可愛かった。童謡に歌われて親しまれていたカラス、子どもたちは、食後、魚などの食べ残りを小皿に入れて外へ持つて行き、「カアラカラ ほんとカラ」なんて、愛嬌のあることばでカラスを呼んで石の上に置き、それを食べさせたものでした。

外で洗濯をして石けんをうっかり置き忘れて家へ入つて、カラスに石けんを取られても憎めない、人間とカラスの交わりでしたから、カラスは高い所へ止まつて人間様を笑っている。日暮れ近くになると、大きな集団を組んで丸山のねぐらに帰つて行きます。あのような光景は最近全く見られなくなりました。子どももの頃を思うとなぜか心がなごみ、懐かしくいろいろな思い出が脳裏をかすめます。

子どもの頃から慣れ親しんできた入船町は、昔は鯨場の網元の町といつても過言ではなかったと思つております。十軒余りの網元の家が軒を連ねて、それに広い干場、道路を挟んで浜も網元の所有地でした。当時は住民も少なく、また人家も点々と建っている程度で、ふもとから丸山を眺め海からの潮風を体いっばいに浴びて、住民はみんなで助け合つて、郷土の生活の基盤を築いてきたことと思われま

す。
現在、これまでの漁業の町、
（次ページ 下段へ続く）

古平の方言

(7)

- ・こび、こんび(ご飯の)おこげ、体の垢
- ・こぶらがえり足(ひきつり)
- ・こまざらえ(レーキ、熊手)
- ・こましゃぐれ(まかせている、大人びている)
- ・ごまんとある(いっぱいある)
- ・ごもくそ(ぶつぶつ文句を言う)
- ・「あいつよくごもくそ言うやづだ」
- ・ごろ(イカの肝臓)
- ・ごろた(玉石、持てるくらいの石)
- ・こわい(疲れた、くたびれた)
- ・こんべ(はい)抜け目ない、手が早い
- ・「あいつこんべはええがらゆだんすナ」
- ・こんば(はる)泣く、無理を言う、ゴボウ
- ・さ(方向(あっちサ)、場所(学校サ))
- ・さいこ、せつこ(余計な口出し、余計なこと)
- ・さかしい、さがし(利口な、賢い、悪知恵)
- ・「あの子もずんぶさがし子だ」
- ・さかす(魚を処理する)
- ・さかむけ(爪の生えぎわの皮がむける)
- ・さかり(最盛期、年ごろ、(動物の)発情期)
- ・ささめ(主として)鰯のえら、魚のえら
- ・ささる(入りびたる、まとわりつく)
- ・「いっつもパチンコ屋サささってる」

- ・さはち(大皿、料理を盛る大きな皿)
- ・しおび(特に塩味の強い鮭、塩鮭)
- ・しみる(凍る(しみ豆腐)、冷たい)
- ・じさい(年忌法要)
- ・したって(だって、そうだけど)
- ・したども(もつともだが、けれども)
- ・「したどもしょうがねえベエ」
- ・したら(それなら、それであれば)
- ・しつかど(しつかり、がっちり)
- ・じつこ(じじ、じいさん)
- ・しつばね(泥がはねた)
- ・「車にしつばねかけらえだヤ」
- ・じつばり(いっぱい、たくさん)
- ・してけれ(してくれ)
- ・しとぎ(米の粉、赤飯を蒸す時かける水)
- ・しない(なかなか噛み切れない)
- ・しなくた(み)女の人をばかにしたことば
- ・(みたくなしを逆に言ったことば)
- ・しのうち(う)鰯漁期の始めから終りまで
- ・ひのる(曲がる、反る、たわむ)
- ・しばや(芝居)
- ・しばれる(寒さが厳しい、凍る)
- ・しべとん(わらぶとん)
- ・(しべ)わらの穂のしんで作ったふとん
- ・しゃく(ひ)しゃく(柄杓)
- ・しゃぐる(しゃくり上げる、強引に引っ張る)
- ・じゃこ、じゃこ(しか)漁場を渡り歩く漁夫



(前ページ下段から続く)
古平町に発展できたことは、先人たちの並々ならぬ苦勞のたま物だと思っています。
長男が小学校四年生の時に、紅葉した丸山の全景をクレパスで写生した絵があります。この絵は古谷製菓のコンクールに出品して賞をいただきましたが、この丸山の絵をつくづく眺めながら、昔から住んでいたかつての入船町のことを思い出しております。

稲倉石の思い出

蚊とハエのいない

(Ⅲ)

北海道一の優秀地区に

富山市 高橋 肇蔵

(元・稲倉石鉱業所勤務)

昭和三十七年。

稲倉石に新参した私が奇異に思ったものの一つに、山合いの傾斜に建てられた古い鉱山社宅の隅々に、一坪にも満たない小さな花壇がびっしりと造られていたことです。

陽当たりも極端に少ない石ころ混じりの瘦弱な土地に、手入れの行き届いた花壇が空き地をうずめていました。

長く厳しかった冬の名残り雪が解けはじめ、小学生が、泥んこ道を一列に並んで学校に通う頃になると、雪解けのわずかな土の中から小さな早咲きの花が顔を出し

「春ですね」

と私たちに呼びかけているようでした。

小さな花壇は季節の移り変わりを知らせながら、雪がちらつくまで絶え間なく咲き競い、板張りの粗末な長屋には似つかない見事なものでした。

鉱山にいらつしやるお客さんも足をとどめ

「こここの鉱山は花の好きな方ばかりですね」

と、しばし花に包まれた風景を眺めていたものです。

しかし、それには訳があったのです。

私が転勤する数年前の事。

鉱山に病気が蔓延するという

不名誉な事態が起こり、鉱山では伝染の媒介となる蚊とハエを徹底的に駆除し、併せて、それまで空き地に埋めたりしていた家庭の雑ばいをすべて焼却する事とし、点在する社宅街の要所に焼却炉を設置したのです。

更に、川の清掃・下水溝の清掃・殺虫剤の撒布を行い、今まで不衛生だった雑ばいが完全に焼却され、悪臭もなくなり、大きな効果をあげたのです。

また、空き地には花を植え社宅街全体を花で飾ろうという運動をからませ、一石二鳥の効果をねらったのです。

ちょうどその頃、北海道では全道的に「蚊とハエのいない北海道建設運動」を展開していた矢先でもあり、すすんでこの運動に参加しました。

あつちが奇麗になればこっちも負けず奇麗にしようという相乗効果が重なり、後志支庁管内では三年連続優勝、北海道全域では二年連続準優勝の後、三年目の昭和三十五年には全道一の優秀地区となり知事表彰を受

けました。

この表彰をいただくのは並大抵のことではなかったそうですが、全住民、とりわけ奥さん方がコツコツと続けた努力が一度ならず二度・三度と栄えある表彰を受けた原動力となったことはいうまでもありません。

名もない山合いの小さな集落とはいへ、稲倉石全体が心をひとつにして推しすすめたこの運動が、花壇に咲く花よりも、もっともつと大きな全道一という大輪の花を咲かせたことを、当時の皆さんにかわってお知らせしたいと思います。

それもこれも、鉱山・社員・住民全体が、環境美化に向かって努力・実行・継続したことへの大きな褒美だったのです。

あれから二十数年余。

稲倉石には往時を偲ぶものもなく、社宅の跡地も雑草に覆われ荒地となってしまうそうですが、あの頃の花の実が芽を出し、花を咲かせ、また芽となり花となり、人目にふれることのない雑草の中で、ひっそりと生きのびているかも知れません。

わが町ふるひら

【1】

本 間 銀 朔



昭和二十四年（昭和）五月十日
正午頃、火災によって西部方面
（新地町・入船町・丸山町・本
町・御崎町・港町の一部）は、
住宅、その他倉庫など七百二十
一戸が全焼し、石蔵、コンクリ
ートの建物以外は強風にあおら
れ、跡形もなく焼き払われてし
まいました。

当日、私は美国町（現在の積
丹町）役場で、小樽法務局管
内戸籍協議会に出席をしていま
した。会議の途中で、

「古平町で火事が発生し、延焼
中」という電話が入りました。

会議は中断され、私はすぐに
旧道を急いで古平に向かい、新
地町の山の上まで来た時には、
新地町・丸山町・入船町一帯は
すでに焼き尽くされて、丸山の
すその辺りが盛んに燃えていま
した。

焼け跡に入ろうとしても一面
くすぶっていて地面が熱く、夕
方になって、ようやくわが家の
焼け跡に行ってみることができ
ました。まだなま温かい地面の
上に、背広姿にコートを抱えた
まま途方にくれて、ぼう然と立
ちすくんでいました。

この日は強風が吹いていて、
火があちこちに飛び火し、また
たく間に焼野の原と化してしま
いました。焼けただれた鉄製品
や土台の石だけが無惨に残って
いるだけで、今、身につけてい
るものを除けば無一物になって
しまったのです。三十三歳のと
きのことでした。

無事であった家族も住むとこ
ろが無く、そのうち父の造った
掘り立て小屋と、子どもたちは
妻の実家に世話になることにな
って、家族別れ別れの生活がし

ばらく続きました。被災してか
ら二か月ほどたった七月上旬、
取りあえず新しく家を建て、不
自由でしたがようやく家族そろ
っての生活ができました。

当時の町長は大沢吉三郎さん
（民選町長第一号）で、助役は
次の町長になった伊藤由松さん
（静内町出身で、旧狩太町Ⅱ現
在のニセコ町助役から古平町助
役）でしたが、町の復興に向け
てただちに町議会議員らと復興
対策本部を設置し、日夜、不眠
不休の活躍をされました。政府
からの復興資金の借り入れのた
めに頻繁に陳情をし、それらの
ご苦労の結果資金を借り受けて

公営住宅も建ち、希望者には長
期にわたって貸し付けられまし
た。当時は簡単な造りですと、
一坪六千円から一万円で住宅が
建てることができました。

町では西部方面に都市計画法
が適用され、区画整理された土
地に住宅を建て、二、三年のう
ちに街並みが出来たので、他町
村からは随分と早い復興と賞賛
されたものでした。これもひと
えに町理事者や町会議員の懸命
の活動と、町民の努力の賜物と
思っています。早いもので、あ
と二年ほどで五十年——半世紀
近い過去の話となります。

△ 続く △



渡 辺 ハ ツ エ

孫 帰 り 姿 に 寂 し さ 置 き 土 産
早 朝 の 電 話 の ベ ル の 不 吉 め き
掲 載 欄 我 が 名 目 に し た 優 越 感



古平ホトリキス会

釣人に西日のさける術のなく	枝付の柿出稼ぎの手土産に	八重桜咲いて今年も留守の庭	父母の里近く遠けり盆の月	休耕田昼顔ばかりはびこれる	納骨を終え惜春の心切	露光るパークゴルフの芝手入れ	崩落の供輦に咲きしか山うつぎ	心地よく江戸風鈴の鳴りひびき	あちこちの媼が出揃う盆踊り	どこからか集まる盆の鴉かな	入院の長が引き盆の帰れなく	日帰りの墓参一ト日の忙しく	盆踊り笛の仲間に子等のをり	甲子園グラウンド整備虹の立つ	夏めくや海の色どこまでも紺
斉藤波留	水見句丈	大島喜恵	仲谷美砂	仲谷比呂子	大和田絵伊	岩瀬みのる	福井幸平	長谷川和子	木村芳園	福井久美子	越野スミ子	越野敏雄	山口浪	仲谷安代	越野清治



福井幸平

昔よく食べたガサエビも今ではすしネタになるほど値打ちがでて、シャコを好まれる方も多
いようです。

ガサエビは、私たちの小さい頃はこの前浜でもよく獲れて、手籠一杯いくらという食べ物で珍しくもなかったが、夏は旬の味でうまかった。がさがさと蝦蛄煮らるまで這ひまわる

けた網で獲られたガサエビは「ガサガサ：：」といそがしく動き回ることから『ガサエビ』と言われるようになったそうです。

ゆでてから尾の殻を指にはめて、なんとなく悪ふざけして遊んだものです。年配の人に聞いたら、「うんだ、うんだ、俺もそんな遊びをした記憶があるよ」と、なんとも懐かしそうな言葉が返ってきました。

ガサエビは、内海の水深十メートルから二十メートルの砂泥の穴に棲んでいて、初夏が産卵期で、漁獲期は五月、六月頃だということです。

蝦蛄の尾のするとき扇ひらきけり
こんな句もあります。

この熊手のような、
ギザギザの鋭い固い殻
を指にはめて悪遊びを
して、知る人ぞ知る古
いお話です。

